え・・・？祓魔師って？？

ゆずぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
え・・・？祓魔師って？？

【Ｎコード】
Ｎ８０９８Ｗ

【作者名】
ゆずぽん

【あらすじ】
相良ユズは、１５年前青エクの最新刊を買った帰り不思議な声と光に包まれた。気が付くと真っ白な部屋に顔だけはいい神様がいた！神がいうには光の正体はイノセンス？！しかもクラウン・クラウン？！！アレン・ウォーカーとなってＤグレの世界に・・・。そして今青エクの世界にアレンとして行く事に――――！？

プロローグ（前書き）

ようこそ！来てくださりとても嬉しいです。
この作品は青の祓魔師を中心にした二次創作作品となります
その為原作のネタバレとなる部分もあります
そのことをご了承の上、先にお進みください

プロローグ

初めまして！元女子高生の相良ユズです。今は転生してアレンと名乗ってます。

知ってる方も多いかと思います。ある物語の主人公になってますｗｗｗ

えーっとですね・・・此処どこっスか??

こんな全て真っ白な部屋１つしか知らないんですけどぉ・・・（汗）

《よぉ。久しぶりだな、ユズ。今はアレンだったか?会いたかったぞ～。》

「やっぱりお前か――――クソ神！私は会いたくなかったよ！！」

《アレンのキャラ崩壊してるよ～（笑）》

はっ！しまった！！落ち着け自分。こんな奴相手にするな。

「・・・コホンッ。お久しぶりですね。それでどういった用件なんです？」

《アレンの力にも慣れただろうし、そろそろ本命のあの世界へ行ってもらおうと思ってな。》

「はぁ？」

《いや言ったよ？アレンになる前に言ったよ？？えっ、ちょっとその顔やめてくんない？馬鹿にするか憐れむかどちらかにしてぇぇ！！！》

「じゃあちょっと15年前を思い出してみよー。」

《スルー?!まさかのスルー?!「うるさいですよ。クラウンベルトｖｖ」むぐおぉぉっ!!》

プロローグ（後書き）

はじめまして！ゆずぽんです
勢いに任せて書き出したお話です
しかも初めてなので、間違いなどもあると思いますが、
あたたかく見守っていただけると嬉しいです
頑張っていくのでよろしくお願いします

第一話　１５年前、そして神との出会い（前書き）

読んでいただいた方にとても感謝です
休みの間に出来るだけ投稿したいと思ってます

第一話　15年前、そして神との出会い

〜15年前〜

私相良ユズは、漫画と小説が好きでとくにDグレイマンと青の祓魔師が大好きだった。

それはきっと主人公が自分と似てるから、かもしれない。私の親はある事件に巻き込まれ、5歳の頃に亡くなった。

私は事件のせいでのトラウマや恐怖症関係が面倒だったのか、紅と灰色のオッドアイが気味悪かったのか、事件のショックで持ってしまった異様な力に恐怖したのか。

親戚にたらい回しにされ続けた。結果、今は仕送りをしてもらいバイトをしながらひとり暮らしをしている。

異様な力というのは一種の霊能力だ。視たり触ったりもできるので、ちょっと手助けをしたりもする。それに何故かすごく好かれてしまって「ユズ様！」「主様！！」などと敬われる。手助けは大変な事も多いけど正直この力を持ち、皆が視えて触れられて話せるのがとても楽しくていつも救われてきた。

［ユズ様〜！青エクの最新刊あって良かったですね！！］

ユズ「ほんとだよね～。まさか学年主任に雑用頼まれるとは思わなかったよ。」

しかも職員会議で使う資料をホッチキスで止めるだけ！！？自分でやれよ！！！！

あっ今話してるのは土地神の名歌君（めいか）！あだ名はメイちゃんｖ犬みたいですごく可愛いｗｗ

ユズ「でもまぁ、新刊買えたから許してやろう！にゃはははは～」

おっと、シュラさんが移っちゃったゼィ☆

メイ［ユッユズ様！！青エクが光ってます！！！汗］

ユズ「へ？うおおおぉぉぉ！！何これぇぇ！」

《・・・・わ・・こえ・・・えよ。》

ユズ「誰？！」

《・・れの・・声に・・・・よ。》

メイ［ユズ様！！その光から声がっっ！！］

ユズ「メイちゃんも聞こえるの？！」

《我の声に答えよ。神に選ばれし異界の使徒よ・・・・。》

ユズ「はい？？――――ぁっ！！！」

なにっ意識が・・・もってかれ・・るっっ

メイ［ユズ・・さ・・・・・］

ユズ「・・・・此処どこなの・・・・。」

？《おはよー！》

Ｏｈ～！！金髪イケメンだ～。

？《これ１巻ない？面白いんだけ――――「なに人が読む前に読んでんじゃボケぃ！！！」ぐふおおぉぉっ！！》

ユズのアッパーが決まった！謎のイケメンは３００のダメージを受けた！！

？《ゴホゴホッいっいいアッパーだねっ！流石だねユズ。》

ユズ「名前まで知ってるなんてストーカー？！イケメンがもったいないぞ。」

？《ストーカーじゃないよ！！イケメンなのは認めるけど「そこは認めんのかよ。」俺は神様だよ。》

ユズ「精神科行けば？？」

自称神《そんな憐れんだ目で見るのやめてええぇ！！って何？！この自称神って！自称じゃないよ！！本物の神様！！！！》

ユズ「うるさいんだよｖｖ黒笑」

《ぎいやああぁぁぁぁぁ――》

そして１０分後

ユズ「それで、神様が私に何の用なの？私の青エクを光らせて声かけてきて。（イライラッ」

神《それは俺じゃない。クラウン・クラウンだよ。》

ユズ「いつの間にかボロボロになった神様は真剣な目で言った（笑）」

神《声にでてるよ～。》

ユズ「わざとだしてんの。」

神《泣いていい？俺もう泣いていい？？いいよね？！》

ユズ「・・・あれ？すごく聞いたことがあるんだけど。《スルー？スルーなの？！！》もしかして・・」

神《ぐすん・・そう！君が好きなDグレイマンの主人公アレン・ウォーカーのイノセンスだ。イノセンスが異界にいる君を選んだんだ。》

ユズ「（うわ、持ち直したぁ・・・。）ちょっと待ってよ！じゃぁアレンはどうなるの？！」

神《ユズがなるんだよ。（ニコッ》

・・・・・・・・・・。

ユズ「はあああぁぁぁぁ――――？？！！！」

第一話　15年前、そして神との出会い（後書き）

もう少し15年前の話が続きます
なるべく早く青エクの世界にいきたいと思います！

第二話　少しの真実と新たな旅立ち（前書き）

１５年前についてが長くなってしまいました
いよいよ旅立ちです
やっと青エクにはいれます・・・。

第二話　少しの真実と新たな旅立ち

ユズ「つまり私にアレン・ウォーカーとしてDグレイマンの世界に行けっていうこと??」

神《うん。あっ女の子のままだから安心して!》

ユズ「じゃぁネアは?!私の中にいるの??」

神《14番目のことだね。実は14番目破壊のネアは―――アレンの血の繋がった父親だったんだ。》

ユズ「うそ・・・。じゃぁアレンはネアからノアの力を受け継いでしまったってこと??」

神《そういうこと。原作でアレンとネアが出会えたのは、アレンの中にあるノアの力がネアを記憶していたからなんだ。だから時々しか会えないし、ネアには何の力もない。つまり宿主ではないから自分の意識も保てたり大切な人を殺さなくてもいいんだよ。》

ユズ「よかった・・・。」

神《さてそろそろ行こうか！！扉オープンｗｗ（＜д＞）》

ユズ「顔文字とかすごくうざっ！ってかドアの中からどこかで見たことある目と黒い手がぁ！！鋼錬じゃん！思いっきし鋼錬じゃん！！？」

神《頑張ってねユズ。アレンとしての役目が終わったら、居るべき世界へ返してあげる。「手につかまれた――！！！」の世界に、ね。って最後まで遮るんだね（泣》

ユズ「え？何の世界って？！！」

神《またここに来たらいうよ。》

ユズ「ふざけんなあぁ！！あ、メイちゃんは？！」

神《元の世界にいるよ。》
彼の居るべき世界にね・・・。まだ言わないけど（＾×＾）

ユズ「メイちゃんに会ったら言っといて！！――――いってきますって。」

神《！クスッ分かった。》

ユズ「後今度会ったらあんたぶん殴るからw覚悟しといてねv黒笑」

神《えぇ？！今いい感じで決まってたよ？！！》

最後に聞こえたのはあのクソ神のウザったいツッコミだった。

ユズ「言ってねぇじゃん！！！」

神《ぶふおぉぉ！！》

ユズの右フックがきまった！神は４００のダメージをくらった！

神《言ったよ！！遮ったのユズじゃ――――「ぁあ？」ハイ、僕ガ言ッテマセンデシタ。申シ訳アリマセンデシタァ！！》

ユズ「はぁ。（アレンモード）それで？私のいるべき世界って何処なんです？？」

神《切り替え早っ！えっとそこは君が生まれた本当の世界なんだ。》

ユズ「私が生まれた世界？？」

神《そう。君は唯一悪魔に愛される存在だった。そのせいで悪魔たちの王にまで気に入られてしまった。俺は頼まれて君を安全な世界へ送った。せめて奴らに対抗出来る力を得るまで・・・。送った先の親は家の玄関に居た籠の中の君を、あの事件が起こるまで大切に育ててくれた。でもまさか神の結晶までもが君に惹かれるとは予想もしなかったけどね。》

ユズ「その世界って・・・・青エク？？」

神《そうだよ。そして君の本当の親は――藤本　獅郎だ。》

ユズ「え・・・・えええぇぇぇ！！！？？？はっ母親は？！」

神《凄い人だぞ？名前はフレア・ログフォート。聖母マリアの子孫で聖騎士の補佐官をしていた。聖母マリアは悪魔にも愛されていた

らしいから、ユズも受け継いだんだろうね。≫

ユズ「・・・生きてるの??」

神《残念ながらユズを生んですぐに亡くなった。藤本は俺を特殊な魔法円で召喚し、君を託したんだ。》

ユズ「そっか・・・。獅ろ・・父さんは原作のままいくと死んでしまう・・・。」

神《変えるんでしょ??》

ユズ「当たり前!!（ニッ」
父さんは死なせない。アマイモンも死なせたくないし・・・原作ブレイクするしかないっしょ!!!

神《よし!じゃあさっそく扉オープン（。Д。★）》

ユズ「だから顔文字うざいっ!!ってまたこれ?!鋼錬パクっちゃっていいの?!真理怒らないのー?!!」

神《Ｈｅ ｉｓ ｍｙ ｂｅｓｔ ｆｒｉｅｎｄ☆》

ユズ「まぢでえぇ？！！あ〝掴まないでー！！《またね、ユズ＾＾》気持ちわる———」バタンッ

扉が閉まり部屋には静寂が戻る。

神《どうか今度こそ彼女に祝福を・・・。》

そしてアレン・ウォーカーとなったユズは青エクの世界へ旅立った。

第二話　少しの真実と新たな旅立ち（後書き）

ユズの親凄すぎ！！
次話はユズの紹介です

＊主人公設定＊（前書き）

今回は主人公ユズの紹介です
そしていよいよメイちゃんも・・・？！

＊主人公設定＊

＊転生前＊

名前：相良　ユズ　（さがら　ゆず）

性別：女

年齢：１６歳

顔：中性的だが可愛い系に入る。目は生まれつきオッドアイ。右が灰色左が紅（あか）

特殊能力：霊能力。昔から幽霊や妖怪や土地神などと話したり、遊んだりしていた。また、力が強いらしく祓うことも出来た。

＊転生後＊

名前：アレン・ウォーカー

性別：女

年齢：０歳から生き、原作通り１５歳で教団に入ったが神の所へ戻った頃はもうすぐ１６歳になるところだった。

顔：原作通りの顔に少し可愛さを足した感じ。ゆずぽんとしては天使と呼べる可愛さｗｗ髪の毛は鎖骨あたりまで伸ばしている。

特殊能力：霊能力。

クラウン・クラウン⇒　原作通り

ノア⇒　ユズではなく、アレン自身の親が１４番目だった。なので、宿主ではなく遺伝として受け継いだため自分で力を操れる。

※ネアの場合「破壊のノア」だったがアレンは「創造のノア」

創造のノア⇒　その場にあるものを思いのままに操ったり、作り直したりできる。錬金術のようだが、等価交換は無視！量だって数だって増やせる。（例：一個の豆から〈ジャックと豆の木〉みたいな木を作れる笑）

＊青エク＊

上のアレンの設定に次のことを足します。

ユズは青エクの世界の住人だった。

父は聖騎士である藤本　獅郎。母は元聖騎士の補佐官で聖母マリアの子孫フレア・ログフォート。フレアはユズを生んですぐ亡くなり、力が受け継がれたことを知った獅郎が神にユズを安全な世界へ送ることを頼んだ。

特殊能力：霊能力⇒　実は母から受け継いだ聖母マリアの力だった。一部の悪魔以外には愛される存在となる。祓う力も強く詠唱の一部分やオリジナルで祓うことが多い。

使い魔：名歌（めいか）あだ名はメイちゃん。ユズとして生きていた世界で親友だった土地神。しかし実は上級悪魔の狼牙（ろうが）。

使い魔２：アマイモン。あだ名は縮めてアモン、アモン君。どうやって使い魔になるかは本編を読み進めてください☆

＊主人公設定＊（後書き）

設定はご理解いただけたでしょうか？
分かりにくい設定で申し訳ありません
※次話からユズをアレンと書きます！！

第三話　初めまして異世界（前書き）

学校があると帰りが遅くなるので投稿が遅れてしまいます
申し訳ありません
いよいよ青エクの世界へ突入です！！

第三話　初めまして異世界

アレ　「前みたいに空から落とされずには済んだけど・・・」

ザアアアァァァァ――――ッ

アレ　「土砂降りの中、扉を学園の校門に繋げるなら、学園の中で濡れない場所に繋げて下さいよ・・・。」

??　「貴女がアレン・ウォーカーさんですか??」

後ろから急に声がした。アレンは声の主の方へ振り返った。

アレ　「メフィスト・フェレスさん・・・ですか??」

メフィ「神に聞いたとおり知っているようですね☆傘に入りなさい。風邪を引きますよ。」

アレ　「ありがとうございます。っくしゅん!」

メフィ「おやおや。理事長室で暖かいミルクティーでも飲んで温まりましょう☆」

メフィ「お砂糖は一つでよろしいですか??」

アレ　「あ、はい。ありがとうございます。いただきます。・・・」
あ～美味しい・・・。なんか久しぶりの和み。

メフィ「口に合いましたか?」

アレ　「はい！とても美味しいです。」

メフィ「！・・・フレアさんそっくりの笑顔。アレン・ウォーカーという方になってもやはり親子なのですね。」

アレ　「！！母と私を知っているんですか?！」

メフィ「もちろんです！貴女の父、藤本獅郎と私が友人なのはご存知ですよね？フレアは元は私の友人で彼に紹介したんです。つまり二人のキューピットは私なんですよ☆」

アレ　「キューピットォ？！メフィストさんが？！！」
　ピエロの間違えじゃ・・・。

メフィ「ピエロではないですよ☆」

　この人心まで読めるの？！

メフィ「声にでてました。」

アレ　「すみません・・・。」

メフィ「フフッ気にしてません。フレアにもよく言われてましたから。性格までそっくりなようですね。・・・さてこれからのことを話しましょうか。あぁまずこの手紙を読んでください☆」

アレ　「手紙ですか？げっ・・・。」
　神からだ・・・。面倒だなぁ。まぁ一応見てみよう。

～～～～～
～～～～～～～～

この手紙を読んでるってことは無事にメフィストのところに着いたんだね。実は君の能力について言ってなかったことがあったんだ。アレン自身の能力、クラウン・クラウンとノアの力はその世界でも使えるよ。

臨界点突破状態のクラウン・クラウンには退魔の力があったよね？あれを使えば人に憑りついた悪魔も祓える。つまりきっと藤本にサタンが入ってもサタン自身を倒せなくても藤本を救うことが出来るかもしれない。

大丈夫。君ならきっと未来を変えられるよ。

――君に聖母マリアの祝福あれ

～～～～～～～～
～～～～～

アレ「・・・・・。」

メフィ「やはりあの人は彼を利用するのですね。」

メフィストはいつもより少し悲しそうに笑って言った。

アレ　「私が救います。父さんを・・皆を・・・・。」
　奥村兄弟も、勝呂君達も、皆・・・・・。

メフィ「一人ではさせませんよ。」

アレ　「え??」

メフィ「私がサポートしていきます。」

アレ　「メフィストさん。」
　この人がすごく頼れるイケメンに見えてきた（キラキラ

メフィ「貴女は私の義娘になるんですからｗｗ☆」

・・・ん?義娘?・・ムスメ??

アレ　「義娘――――?!!」

第三話　初めまして異世界（後書き）

この小説では獅郎生存させちゃいます
そしてメフィストすごくいい人です
次から何話か主人公と獅郎の再会編にしようと思います

第四話　アレンの決意（前書き）

やっと第四話まできました
今回はメフィストとの絡みだけです
この小説ではとにかくメフィストがいい人です

第四話　アレンの決意

メフィ「落ち着きましたか??」

アレ　「なっなんとか・・・。」
　こんなに取り乱したのは師匠の借金についてラビに聞かれた時以来だ・・・。

メフィ「この世界には貴女の戸籍がないんです。しかし私の義娘となればなんとかなりますし、色々と動きやすいはずです。」

　なんかすごく頼りになる雰囲気かもしだして―――「一番は可愛い義娘が欲しかったからなんですけど☆」なかったあああぁぁ!!!?

メフィ「近いうちに上へ挨拶をしに行きましょう。貴女の実力を少し見せればある程度の地位を貰えるはずですｖｖどんな顔するでしょうねｗｗｗアハハハハハハッ☆」

　ワオ、一気に悪魔みたいな笑顔に・・・おっと悪魔でしたｖｖ

メフィ「決めるのは貴女です。今決められなければ時間をおいてでも「義娘になりますよ。」！・・・・そんな簡単に決めてよろしいんですか??」

アレ　「メフィストさんは、父と母の昔からの友達です。それに私は貴方達を元から知っていますし、直接会って信頼できる方だと思いました。これからよろしくお願いしますね。お義父さんv」

メフィ「！・・・フフッよろしくお願いしますね。アレン。
　あの、もう一度お義父さんと呼んでくれますか??（キラキラ」

アレ　「そういえば、「スルーッ?!これがスルーというものなんですね?!」お父さ・・獅郎さんには会えますか?」

メフィ「私は気にせずお父さんと呼んでいいんですよ。今の貴方にとっては二人とも父親なんですし（ニコッ）彼ならしばらく任務はありませんから、協会にいるはずです。協会までの扉の鍵、スペアを作っておきますね。」

アレ　「!私は幸せ者です。二人もお父さんができた・・・。」
　失くしてからずっと求めてた家族。自分が憧れてた世界。絶対守ろう・・・。そして青エクで一番好きなキャラ―――勝呂君とウハウハする!!絡みまくる!!!（実は作者も関西育ちで勝呂君が大

好きなんですv）

アレ　「お義父さん！！ヴァチカン本部に行きましょう！今すぐ行きましょう！！！」

メフィ「おや☆急にどうしたんです？」

アレ　「さっさと上に話をつけて動けるようにして、お父さんと再会しなきゃ何も始められない気がするから！（ニカッ」

アレンの目は何かを覚悟したような強くまっすぐな目をしていた。

第四話　アレンの決意（後書き）

読んでくださりありがとうございます
話の内容に少しゆずぽんのことをだしました
ゆずぽんも昔のことですが勝呂君と同じで京都育ちなんです！
関西男子が大好きです
次はいよいよ親子の再会！！

第五話　再会（前書き）

主人公が両親のもとへ！

第五話　再会

メフィ「いやぁ、楽しかったですね～。まさか全部一撃で倒してしまうとは☆」

アレ　「メフィストさんが悪魔を用意してるなんて予想もしてなかったです（汗」
　え？何があったかって？？私はつい１時間程前、この笑顔が悪魔なお義父さんとヴァチカン本部に行ってきたんです。しかも姿を見られないようにあっついフード付きの黒マントを被せられて連れて行ってもらったんです。そうしたら上の方達は実力で決めるとお義父さんに言ったんです。それを聞いた途端、この人・・・２０匹程の中級悪魔を呼び出しやがって、その次に上級悪魔１０匹を休む暇なく呼び出しやがったんです！！思わずクラウン・クラウンで握り潰しちゃいました（テヘッ☆
それを見た上の方達驚きながら引いちゃってました。でも実力は認めてもらえたらしく、なんと！！！

アレ　「お母さんと同じ聖騎士の補佐官になるなんて・・・。」

メフィ「貴女の存在は上と私しか知りません。上は黒マントの貴女しか知りませんが。藤本君には」

アレ　「自分で知らせに行きます。お母さんのお墓にも知らせに行ってきます。」

メフィ「ではこの鍵をどうぞ。――いってらっしゃい。」

アレ　「！いってきます！お義父さん（ニコッ」

鍵を差し込み扉を開けた。

メフィ「か・・・可愛いいいいぃｗｗｗ今のフレーズもう一度お願いしま――――ガチャンッッ

アレンは迷わずメフィストの言葉を遮り扉を閉めた。アレンは少しうざく感じた・・・。

アレ　「ここが正十字協会か・・・。あの、すみません！」

協会の前を掃除していた協会の人にフレアの墓の場所を案内しても

らい、獅郎を呼んで来てもらうことにした。呼びに行ってもらっている間、アレンはフレアの墓を目にして手を合わせてからゆっくり話し始めた。

アレ　「はじめまして。・・・久しぶりのほうがいいのかな？お母さん、私ユズです。今は色々あってアレン・ウォーカーと言います。私つい最近この世界に帰ってきました。そして聖騎士補佐官になったんです！お母さんと同じですよ。」
　あぁ・・・涙出そう・・・。

アレ　「お母さん。私――――――「ユ・・ズか？？」！！ぁっ」
　お父さん・・・・。

獅郎　「ユズなんだろ・・？フレアにそっくりだ・・・。」

アレ　「わっ私は」　　ギュゥッ

獅郎に抱きしめられるアレン。

獅郎　「生きててくれたんだな・・・・。もう１６歳か。大きくなったなぁ・・・。」

ポタッポタポタッ

アレ　「！！」
　泣い・・てるの・・・？

獅郎　「生きててくれてっ本当によかったぁ　〝！！！」

抱きしめる力が強くなった。

アレ　「っ今の私は転生してアレン・ウォーカーという存在になりました。外見だって少し変わりました・・・。それでも貴方は私のことを「娘だよ。」？！」

アレンは獅郎の顔を見た。獅郎は涙を流しながら、微笑んでいた。

獅郎　「転生したって、外見が変わったって関係ねぇ。お前は・・ユズは昔も今もこれからもずっと俺とフレアの娘だ。俺たちのたった一人の愛しい娘だよ。」

アレ　「ひっく・・・わだしが！アレンになったわだっしが！貴方を父と呼んでっっいいんでずが？」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながらアレンは獅郎に尋ねた。

ここに来るまでずっとどこかで考えてしまっていた。もしかしたら拒絶されるかもって・・・。今頃会っても迷惑かもしれない。アレンとなってしまったのだから、ユズではないといわれてしまうかもしれないって・・・。　　でも――――

獅郎　「当たり前だろ！！　――――おかえり――。」

この人のこの笑顔を見たら自分が馬鹿だったって思って、私は思ったことを口にした。

アレ　「――――ただいま！お父さん！！」

二人はフレアの墓の前で、涙を流しながら笑顔で抱きしめあった。その時かすかにおかえり、という女の人の声が二人には聞こえた気がした。

第五話　再会（後書き）

再会できて本当によかった・・・
次はメイちゃんとの再会が?!

第六話　父親の子供さを知る　メイちゃん登場！！（前書き）

もう一つ小説を書き始めたので
更新がますます遅くなりそうです
時間がかかってすみません

第六話　父親の子供さを知る　メイちゃん登場！！

獅郎　「そうか。お前が補佐官になるなんてなぁ。フレアも喜んでるだろうな・・・。だが　メフィストがお義父さんっつうのは許せん！！！あいつにアレンはやらん！！！！」

ぅ～ん。なんか嫁に出すのを反対しているようd「許すも許さないもアレンはもう私の義娘になってますし～。」

アレ　「ぬおぉっ！いつから居たんですか？！」

メフィ「そうか。という所からです☆」

はい。つまり最初からいたんですね。あ、言い合い始まった。

「神父は一人で聖書でも読んでいなさい！！」「うるせぇ！俺あれ読むの嫌いなんだよ！！お前が読めよ！」「貴方は悪魔の私に死ねと言うのですか？！」

・・・餓鬼だ。

これからが心配になり始めたアレンだった。

「クゥ～ン。」

アレ　「？何かいるんですか？？」

獅郎　「ハァッハァッこのピンク魔人！！え？あぁ昨日拾った犬だ。見るか？」

アレ　「！！メイちゃん？！」

メイ　［ユズ様！！会いたかったです！！！］

飛びついた名歌。それを抱きしめたアレン。

メイ　［あ、今はアレン様のほうが良いですね！］

アレ　「どうしてメイちゃんがこの世界に？」

メイ　［実は僕悪魔だったらしいんです。］

アレ　「！メイちゃんが？！！」

メイ　［上級悪魔の狼牙らしくて、貴女が消えた日からずっとこの世界でお待ちしていました！］

アレ　「ずっと・・・私がクラウン・クラウンに導かれた日から？っメイちゃん！！」　ギュッ

メイ　［僕はアレン様が大好きなんです。小さい頃からずっと一緒にいてくれたただ一人の御方ですから！］

アレ　「メイちゃん！ありがとうっ！！これからもずっと一緒にいてくれる？」

メイ　［僕は貴女の使い魔となってずっと一緒にいます！！昔貴女に助けられた分、これからは僕がお守りします！！］

アレ　「ありがとっ！これからもよろしくね！！」

メフィ「・・・あのすみません。そろそろ私達も会話に混ざってもよろしいですか??」

獅郎　「アレンの犬だったのか??」

・・・うん。二人のことすっかり忘れてました☆

獅郎　「そうか・・・。名歌!これからも娘を頼むな!!」

メイ　「わんっ!!［お任せ下さい!獅郎様!!］」

メフィ「契約はすでに終えているのですね?」

アレ　「昔から一緒に居たので、いつの間にか契約していたみたいです。!そういえばお義父さんはなんでここにいるんです??」

メフィ「私としたことが忘れてました。お二人に任務です☆親子で初の任務ですよ~。」

獅郎　「げっ！もう少し休みたかった・・・。今からいけるか？アレン。」

アレ　「はい！メイちゃん！行きますよ。」

メイ　［はい！アレン様！］

アレ　「ではお義父さん！行ってきます。」

メフィ「いってらっしゃい☆」

こうしてアレンは獅郎と名歌と共に任務へ向かった。
学園へ帰るとメフィストと獅郎がどっちが父親にふさわしいか、という言い合いを3時間もしてアレンをキレさせたことは名歌しか知らない。

第六話　父親の子供さを知る　メイちゃん登場！！（後書き）

次はアマイモンとの絡みです
アマイモン可愛すぎるｗｗ

第七話　いつの間にか使い魔に。そして義娘の反抗期？

メフィ「アマイモン・・・何故ここで私のアレンとお茶してるんです？！」

アマイ「兄上お帰りなさい。お菓子美味しいですよ～。」

アレ　「それ答えになってないですよ。っていうか私のっていうのやめてください☆なんかうざいです。「ひどいっ！！」実はお菓子を食べにきたら部屋の真ん中で倒れてたんですよ。しかもお腹の空きすぎで。」

アマイ「アレンが沢山くれたんです。アレンとお話ししながら食べてました。」

メフィ「なんか仲良く見えますよ。」

「「仲良しになったんですよ。」」

メフィ「わっ私がいない間にそんな仲良くなっているなんて・・・

ずるいですよ!!（泣）」

アマイ「兄さん。うざいです。ね?アレン。」

アレ　「アモンの言うとおりです。メフィストさん。」

メフィ「!!おっお義父さんと呼んでくれないんですか?!」

アレ　「最近呼ぶ価値があるか分からなくなっているんです。まぁ反抗期だと思っといてください。」

メフィ「そんな・・・・。」

部屋の端でいじけ始めたメフィスト。

1時間後

アマイ「そろそろ帰りますね。兄さんもいいかげんいじけるのやめてくださいね。」

アレ　「また今度呼びますね。お義父さんもう立ち直ってください。」

メフィ「お義父さんと呼んでくれましたね！アマイモン、早く帰りなさい！シッシッ！」

追い払うようにするメフィスト。

「「・・・ハァ。」」

アマイ「アレン。契約に関係なく遊びに来てもいいですか？」

アレ　「もちろん！使い魔の前にアモンは友達ですから。」

アマイ「ありがとうございます。それじゃぁ。」

アマイモンはベヒモスを連れて帰って行った。

メフィ「アッアレン。今の話を聞いてるとまるでアレンがアマイモンの・・・」

アレ　「アモンはさっき僕の使い魔になりましたよ？メフィストさんがいじいじしてる間に。」

メフィ「なんですってーー？！！」

すごいカマっぽい・・・。

メフィ「それより！またメフィストさんになってますよ！！」

アレ　「え？？わざとですよ☆」

メフィ「・・・いやですぅぅ！！お義父さんがいいですぅぅ～！！！（泣）」

アレンはこうしてメフィストがいじけている間にアマイモンを使い魔にしてしまった。だがそれよりもいじいじし始めたメフィストの相手をすることの面倒くささを思い知ったアレンだった。

第七話　いつの間にか使い魔に。そして義娘の反抗期？（後書き）

＊メフィストがいじけてる間＊

アマ　アレンとは話があいます。

アレ　そうですね！こんなに食べ物の話で通じ合える人全くいなかったので嬉しいです！

アマ　そうだ。僕をアレンの使い魔にしてください。

アレ　え？！

アマ　アレンの事気に入りました。それにアレンがしようとしてること僕もお手伝いしたです。

アレ　（何この子ー！ちょーいい子なんですけど！！！）いいんですか？僕なんかで。

アマ　アレンじゃなきゃ言いません。ベヒモスもアレンが気に入ってます。

アレ　・・・わかりました。僕と契約してくれますか？

アマ　もちろんです。ところで兄上はどうします？

アレ　ぅーん。アモンが帰るころに声かければいいですよ。

アマ　そうですね。あ、そういえばこの間バクダン焼きを食べました。

アレ　バクダン焼き?!それはどんな食べ物なんですか?!（キラキラ）

という

ことでした。

第八話　原作突入！　嗤う青闇魔と白の道化師（前書き）

やっと原作入りです
1巻の最初から頑張ろうと思います！

第八話　原作突入！　嗤う青闇魔と白の道化師

アレンは名歌に乗り、急いでいた。名歌もとにかく早く走っていた。二人の表情は必死そうでどこか焦っていた。その理由はアマイモンが朝早く尋ねてきて知らせてくれた内容が原因だった。

父上が物質界に行くと言っていました。もしかしてアレンが言っていたあの日って今日なんじゃないですか？？

アレ　「よりによって任務がある時にっ！」

＊燐ｓｉｄｅ＊

獅郎　「物質界に存在しながらにして・・・虚無界の神であるこのオレの“炎”をひく・・・！！お前は物質界を手に入れる為に不可欠だ！！」

燐　「うあああ　ぅ！！！助けてくれ・・・！！」

俺、このまま・・・死ぬのか？ジジィもこのままじゃ・・・！

??　「クラウン・クラウン。」

燐の目の前に、白いマントをまとった仮面をつけた者が現れた。男か女かも分からない。

獅郎　「！！何もんだぁ？」

??　「ただのエクソシストです。その人の身体返してもらいますよ？――――サタン。」

ザシュッ！！

獅郎　「ぐあああぁぁぁ！！ぎゃあああ！！てめぇ何しやがったぁぁぁ゛！！」

燐　「！！ジジィー！お前！！ッ！」

首に痛みを感じた燐。

こい・・つ・・・・。

??　「しばらく眠っていて・・・・。今だ・・や・・らか・・・・・・。」

なんて言って・・る・・・・・ん・・だ?

＊燐ｓｉｄｅ＊～ｆｉｎ～

メイ　［アレン様！］

アレ　「燐君を向こうへ運んでください！もうすぐお義父さんが来るはずです！」

メイ　［分かりました！！］

獅郎　「力が抜けていく！！何故だ！！！こいつは死んでいないのに！！」

アレ　「僕のこの剣、クラウン・クラウンには退魔の力があります。だから切っても人は切れないんです。――――虚無界に帰りなさい。

サタン！」

ザシュッ！！！

獅郎　「あ〝あぁあああぁぁ〝！！クソがぁっ！！！！」

ドサッ

アレ　「お父さん！！」

獅郎　「・・・・はぁっ・・・・はぁっ・・・・・。」

息がある・・・。間に合ったんだ・・・！

アレ　「よかった・・・。間に合って本当にっ。」

メフィ「アレン！！彼は無事ですか？！」

アレ　「息はありますが危険な状態です！！急いで治療しないと！」

メフィ「扉を開けます。彼は名歌に運んでもらいましょう。」

アレ　「メイちゃん。頼んでいいですか??」

メイ　［もちろんです！お任せください！］

ピッ・・ピッ・・ピッ・・

理事長室の棚の奥。いわゆる隠し部屋に三人はいた。部屋は真っ白で真ん中には呼吸器を付けた獅郎がベッドにいた。アレンはベッドの横にある椅子に座り、獅郎の手をにぎっている。それをちょっと？羨ましそうに後ろから見るメフィストは、咳払いを一回してアレンに話しかけた。

メフィ「もう命に別状はありませんが、いつ目が覚めるかは分からないそうです。」

アレ　「そうですか・・・。でも生きててくれるならそれでいいです・・・・。」

メフィ「彼が生きていることは私と貴女と彼を診せた医者と使い魔達だけです。・・・奥村兄弟には言わないんですか??」

アレ　「まだ言いません。二人にはこれから沢山の試練がまっています。特に燐君には。だから少しの覚悟では駄目なんです。」

メフィ「藤本君の死。彼らには大きなものです。」

アレ　「えぇ。だから、お父さんの死は彼らに強い覚悟をさせたはずです。それに決意も・・・。」

メフィ「決意、ですか。」

アレ　「雪男君には燐君を守るという決意。今は燐君がお父さんを殺したっていう想いもあって混乱してるかもしれません。でも大丈夫です。それに燐君はサタンを倒すこと。そして―――僕を見つける事。」

メフィ「！！？」

アレ　「僕は彼の目の前でお父さんをクラウン・クラウンで切り付けました。きっと彼は僕とサタンが殺したと思っているはずです。」

メフィ「アレン・・・。自ら憎まれ役になるなんて馬鹿ですね。」

アレ　「うるさいですよ、メフィストさんv」

メフィ「もうパパとは呼んではくれないんのですかぁ？！！」

アレ　「誰もパパだなんて言ったことないですよ☆それより、燐君を迎えに行ってくださいよ。僕は本部に行って来ないといけないのに。」

メフィ「おや？任務なんて入ってましたっけ？？」

アレ　「次の聖騎士を決めているらしいんです。だから補佐官を辞めに行くんです。僕が補佐したいのはお父さんだけですから（ニコッ」

メフィ「！そうですか。・・・・それより、もう一度笑ってください！！今の笑顔は写真に収めておくべきだ！！！「早く迎えに行け（黒笑）」ハイ！！（汗」

お父さん。僕は貴方が目を覚ますと信じてます。だからそれまで僕が守ります。それが補佐であり、娘である僕の役目だと思うから――。

第九話　兄と弟　燐の決意！（前書き）

第八話から原作に入りました
原作の内容に入っている話は、タイトルに原作のタイトルを使ってます！
はい。どーでもいいですよね。

ここまで読んでくださっている方に感謝です

第九話　兄と弟　燐の決意！

＊燐ｓｉｄｅ＊

なんなんだよ。大人しく殺されるか、自殺の二択だと？冗談じゃねぇ！！

燐　「仲間にしろ！」

メフィ「？！！」

燐　「お前らがどう言おうが・・・・・・俺はサタンとか・・・あんな奴の息子じゃねぇ！！俺の親父は・・・」

俺と雪男を育ててくれたのは・・・。俺をいつも庇ってくれたのは・・。俺をいつも心配してくれたのは・・・。俺を息子だって、笑って言ってくれんのは・・・

燐　「ジジィだけだ・・・！」

メフィ「祓魔師になって・・・どうするんです？」

燐　「サタンをぶん殴る！！！」

メフィ「フッ　フフハ！ウハハハハハ！！グハハハハ！！これはいい・・・！ヤバイ　久々にきました！ハハハハハハ！」

燐　「何がおかしいんだよ！つかテメーの格好のほうがよっぽどおかしい――「これは私の正装です！」」

メフィ「しかし、正気とは思えん！」

燐　「正気だ！！」

メフィ「ククク・・・サタンの息子が祓魔師・・・・！！　面白い！いいでしょう！」

「ちょ！？フェレス卿！」

燐　「えっいいのか！？」

メフィ「但し貴方が選んだ道は荊の道。それでも進むとおっしゃるのならば。」

燐　「・・・俺はもう人間でも悪魔でもない。・・・だったら祓魔師になってやる！！」

＊燐ｓｉｄｅ＊～ｆｉｎ～

メフィ「お待たせいたしました☆どうでしたか？入学式は。弟さんが新入生代ｈｙ「祓魔師にはどうやってなるんだ？」貴方まで私の言葉を遮るのですね・・・ぐすん。・・・まぁやる気満々で結構ですが、まずは塾に通っていただきます。」

燐　「塾！？」

メフィ「はい。そこでまずは祓魔訓練生として悪魔祓いを学んでいただく。塾は今日が初日です。案内しましょう。　ただし！一つ警告です！貴方がサタンの落胤である事は秘密です。尻尾を上手く隠し、耳や歯なども誤魔化せられても炎はシャレにならない。自制してください。」

燐　「・・・・・努力するよ。」

メフィ「・・・・結構です。では参りましょう☆　1・2・3(アインスツヴァイドライ)♪」
ポンッ

燐　「いっ犬ぅー?!!可愛い・・・・。」

アレンと名歌はというと、本部からの帰り道。列車の中で眠っていた。

メイ　［アレン様！もうすぐ学園に着きますよ。］

アレ　「ふわぁ～。ありがとうメイちゃん。久しぶりに列車に乗りましたが、寝てしまいましたね。景色を見たりすればよかった。」

メイ　［仕方ありません。上の奴らがなかなか辞めることを認めず、夜中も寝ずに話していたんですから。］

アレ　「結局、復帰する気になったら連絡するってことでＯＫもらえましたけど・・・・。」

なんか面倒ですね～。それよりお義父さんは上手くやったのでしょうか・・・・。とてつもなく不安です。

アレンが列車の中で不安がっている頃、塾の教室では・・・。

雪男　「大人しく騎士本部に出頭するかいっそ――――死んでくれ。」

燐　「・・・なんだと・・・。お前・・・！ジジィが死んだのは・・・まさか・・・俺のせいって思ってんのか！！」

・・・・アレンの不安は見事的中していたのでした。その日の夜、理事長室から叫び声と必死な謝罪が聞こえたかどうかは、またまた名歌しか知らない。

第十話　食い散らかしとトサカ頭の出会い（前書き）

自分で改めて読んでぅーん・・・って感じだったので、書き直しちゃいました。
二人の出会いはなんか難しい・・・。

第十話　食い散らかしとトサカ頭の出会い

アレ　「・・・蝦蟇（リーパー）を怯えさせるとは思いませんでした。」

何かあった時のために張っていましたが、雪男君もいるようでしたし監視はいいみたいですね。

アレ　「さて。僕も準備しようかな。」

＊竜士ｓｉｄｅ＊

竜士　「・・・なんで廊下にたこ焼きが落ちとるんや。しかもその先には焼きそばパン？」

落ちている食べ物を追っていく。すると先のほうでズルッズルッと何かを引きずる音がした。

悪魔か・・・？！

竜士　「・・・・・・は？？」

アレ　「？ふぉへ？？もぐもぐ」

そこには食べ物があふれるくらい入った袋を引きずりながら、サンドイッチを食べている女がいた。

竜士　「お前何しとるんや・・・。」

侵入者か？もしかして悪魔なんか？？

アレ　「――――食事ですけど？」

その女とはアレンだった。

竜士　「んなもん見たら分かるわ！！俺が聞きたいんはなんでそんなに袋に食べ物突っ込んで引きずりながら歩きまわっとるんかいうことや！！お前が通ってきたところみてみぃ！たこ焼きやらシュークリームやら落ちすぎや！！！しかも納豆巻きは匂いすぎやねん！！どーにかせぃ！！！はぁ・・はぁ・・」

一気に言った竜士は酸欠気味になり、言われたアレンは目を大きく見開いたまま固まっていた。

アレ　「・・・そうですね。ご迷惑おかけしました。（ペコリッ）でもまさか落としてきてるとは、まったく気づきませんでした。」

竜士　「そんな入れとったら落ちるに決まっとるやろ・・・。」

アレ　「・・・そうですね（笑）片づけておきます。注意してくださってありがとうございます。それでは、また。」

竜士　「？また会うかわからんやろ。見覚えないし、ここの学生とちゃうんやろ？？」

アレ　「貴方とはまた会える気がするんです。」ズルッ・・ズルッ

竜士　「美人やけど、不思議な奴やな。・・・！おい！！言ったそばからフランスパン落とすなや！！！」

・・・今度会ったら名前聞くか。

竜士もどこかでまた会えるのではと考えていた。でもまさか塾で会うことになるとは思ってもいなかった。

＊竜士ｓｉｄｅ＊～ｆｉｎ～

翌日、散らかっていた廊下はシミ一つなかった。そして竜士以外にも落ちてる食べ物を見た人間が結構いたらしく、学校の七不思議と

なった。そしてアレンが理事長室に行ったとき、メフィストとその使い魔がやつれていた事にアレンは気づかぬふりをした。

第十話　食い散らかしとトサカ頭の出会い（後書き）

アモ　アレ～ン。来ちゃいましたぁ。
アレ　アモン！お久しぶりですね。今日はどうしたんです？
アモ　遊びに来たんです。お土産にバクダン焼きを持ってきました。
アレ　！！ホントですか？！さっそく食べましょう！
二人　いただきます。もぐもぐっ
アレ　おっ美味しい（キラキラ）
アモ　もぐもぐっ名歌も食べますか？
メイ　いいの？ありがとう！もぐもぐ。！美味しい！！
アレ　メイちゃんとアモンって意外に仲いいですよね。もぐもぐ
アモ　使い魔同士ですから。たまに兄上についての愚痴を聞いてもらっています。もぐもぐ
アレ　そうなんですか・・・。メイちゃん！！僕の話を聞いてくれますか？！もぐもぐっ
メイ　・・・聞きますから、もう少しゆっくり食べても・・・。
二人　メイちゃん！／名歌。食事は弱肉強食なんですよ！
メイ　そっそうですね（汗）

第十一話　奥村兄弟との出会い

アレ　「こんな朝早くから何かようですか？」

メフィ「なんか冷たくないですか？コホンッ実は奥村兄弟に君を紹介しようと思いまして。階は違いますが、一応同じ旧男子寮に住んでるんですし。」

アレ　「それに塾にも通いますしね。」

コンコンッ　「どうぞ。」　ガチャッ

雪男　「理事長。何か御用ですか？？　そちらは・・・。」

燐　「どうしたんだ？雪男。　？誰だそいつ？？」

メフィ「今日は彼女を紹介するために呼んだんです。アレン。」

アレ　「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください。」

メフィ「彼女は事情がありまして入学式に間に合わなかったんですが、塾に通う事になっています。」

雪男　「そうなんですか。奥村雪男です。悪魔薬学の講師をしています。授業の時は先生でお願いします。」

燐　「俺は奥村燐！俺も塾に通ってんだ！よろしくなアレン！！」

アレ　「よろしくおねがいします！」

メフィ「いやぁ。アレンに友達が増えてよかったです。パパは心配で心配で・・・・。」

・・・・・・・・は？？

「「パパぁぁーー？！！」」

燐　「むっ娘なのか？！こいつの？！！」ビシッ

メフィ「指ささないでくださーい。」

アレ　「義理の娘ですよ。義理の。」

燐　義理を2回言ったぞ。

雪　強調したね。2回言って。

メフィ「それと階は違いますが、アレンも旧男子寮に昨日から住んでいますのでご近所同士としても仲良くしてくださいね☆」

燐　「お前もあそこに住んでんのか？！！」

アレ　「そうですよ。あぁ、食費は２０００円ではありませんけど（ニコ）普通生きていけませんし、貯めておいたバイト代があるんで。」

この間ちょっと絡んできた奴らとポーカーをしてがっぽりとｖ（黒笑）

雪男　「（・・・アレンさんが黒くなった・・・。）でっではもうすぐ授業も始まりますし、行きましょうか。」

アレ　「はい！ではいってきます。」

メフィ「いってらっしゃい。」

燐　「アレンはなんで入学式に出られなかったんだ??」

雪男　「兄さん。アレンさんにも事情があるんだから。」

アレ　「いいんですよ。詳しくはあの義父関係ですかね?そうだ。燐はなんで祓魔師になりたいんですか?」

燐　「なんだよ急に。」

アレ　「いえ、同じ場所で学ぶ仲間ですし色々知りたいなって。」

燐　「ふーん。俺はな!サタンをぶっ飛ばすんだ。」

アレ　「いい目標ですね。」

雪男　「笑ったりしないんですか？「なっ雪男！！」聞いた人は大体爆笑ですよ？」

アレ　「僕もそんな感じですし。」

燐　「そうなのか？！あっあのさ、白いマント着てて仮面付けた奴みたことねぇ？」

ドキッ

アレ　「さぁ。その人がどうかしたんですか？？」

雪男　「兄がいうには、僕らの義父が死んだとき居たらしいんです。」

燐　「アイツジジィを剣で切りやがったんだ。でもなんかサタンみてぇな嫌な感じはなかった。だから会ってジジィを切った理由を聞きてぇんだ。」

アレ　「・・・そうなんですか。」

　その探している者がここに居ると知った時、貴方はどうするんでしょうか・・・。まぁ、まず殴られそうな気がします。

雪男　「呼ぶまでここで待っていてもらえますか？」

アレ　「あっはい。」

燐　「あとでな！アレン！！」

アレ　「はい。」

・・・お父さん。貴方がいつ目覚めるかはわからないけど、守ろうと思っていたモノは僕が守ります。そしてここの生徒も・・・皆、守ります。エクソシストは破壊者かもしれないけど、ユズは救済者でもありたい。

雪男　「では、どうぞ。」

アレ　「はい。」

アレンは目の前の扉を開けた。

第十一話　奥村兄弟との出会い（後書き）

メフ　あぁーアレンは大丈夫でしょうか。もう挨拶をしたのでしょうか。クラスの子とは話せているのでしょうか・・・あぁぁぁ！！
アレェェェン！！！
アマ　・・・名歌。兄上を何とかしてください。
メイ　無理ですょ。あの状態のメフィスト様はアレン様以外にはなんともできません。ほっとけばいつかは治まります。
アマ　いつですか??
メイ　・・・・・・。
アマ　・・・・・・。
二人　・・・・・・。
　早く帰ってきてください。アレン／アレン様。

第十二話　自己紹介と友達

ドアの向こうには雪男を含め１０人ほどの人がいた。
目の前には教壇の前に立っている雪男が微笑んで待っていた。
生徒側には燐がキラキラした目で一番の前の席から視線を送ってきていた。そして後ろの方には驚いた顔をしたトサカ頭がいた。アレンは思わずクスッと笑った。

アレ　「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください（ニコッ）」

??　「坊！あの子美人さんやぁｗｗ」

竜士　「耳元で叫ぶなや。志摩。」

アレ　「また会えましたね。僕の言った通りだったでしょう？」

竜士　「ほんまやな。」

雪男　「アレンさん。勝呂君と知り合いのようですね。じゃぁ席は勝呂君の隣でいいですか？」

アレ　「はい。」

二人は改めて自己紹介をした。そしてすぐ授業が始まった。

アレ　「えっと、竜士。教科書見せてもらってもいいですか？」

竜士　「あぁ。ええで。まだもらってないんか？？」

アレ　「えぇ。ちょっとした手違いで3日後には届きます。」

お義父さんが自分の漫画と一緒に売っちゃったんです☆だなんて言えない・・・。

先生　「では、ウォーカーさん。ここの第1章を暗唱してもらえますか？」

アレ　「あっはい。“太初（はじめ）に言（ことば）ありき。～」

アレンは唄のようにすらすらと言葉にしていった。周りはスラスラと暗唱する転入生に驚きを隠せなかった。もちろん、隣の席の竜士

もだ。しかし竜士の場合、張り合える人間が現れたという嬉しさもあった。

アレ　「～。”これでいいですか？」

先生　「よくできました！！」

？？　「アレンちゃんって頭えぇのん？！めっちゃすらすらやったやん！！」

アレ　「えっと貴方は・・・」

竜士　「こいつは志摩廉造。そっちが三輪子猫丸や。」

アレ　「志摩君と三輪君・・・。」

子猫　「気軽に子猫丸でぇえですよ。」

アレ　「じゃぁ僕もアレンでいいですよ。」

志摩　「僕もれんぞ―――「志摩は志摩でえぇ。」ちょっ、坊なんで遮るん？！」

アレ　「分かりました。志摩って呼びますね（ニコッ）」

志摩　「かわえぇからＯＫですわ（デレ～）」

燐　「うわ、志摩の顔気持ち悪ぃ。」

志摩　「ちょっ奥村君それひどないぃ？！」

燐　「ははっ悪い！しえみ。隠れてねぇで出てこい！」

しえ　「きゃっ！・・・あ・・あのアレンちゃん！わわわわたっ私と、おっお友達になってください！！」

アレ　「・・・・・。」

少し驚いた顔をしたまま固まったアレン。
周りは［？］のような顔をしてアレンを見た。

竜士　「？どないした。アレン！」

アレ　「！あ、すみません。その・・女の子に友達になってと言われるの初めてだったので、驚いてしまって・・・。」

志摩　「えぇ？！そうなん？！！」

アレ　「僕、髪と呪(これ)いがあるので恐がられてて・・・。同じ年の友達は皆が初めてです！僕で良かったら是非友達になってください！」

しえ　「やったぁ！あ、私は杜山しえみ！しえみって呼んで！よろしくアレンちゃん！！」

アレ　「よろしく！しえみ。」

燐　「なぁアレンのその目の周りのって刺青なのか？なんかかっこいいぞ。」

アレ　「！クスッ！かっこいいですか？燐は面白いですね。」

竜士　「いや、俺もアレンにあってると思うで。その銀髪も綺麗やし。」

アレ　「きっ綺麗・・／／／ありがとうございます！／／／／」

志摩　子猫さん。坊が女の子褒める所、僕初めて見ましたわ。坊ってもしかして・・・。

子猫　僕も初めてや。本人は気づいてはらへんけど多分・・・。

二人　惚れとるんやろうなぁ。

アレ　「へ？称号（マイスター）ですか？？もう決めてますよ。」

しえ　「そうなの？！アレンは何を取るの！？」

アレ　「僕は騎士（ナイト）・手騎士（テイマー）・詠唱騎士（アリア）ですよ。」

しえ　「３つも取るの？！」

しえみの驚いた声に驚いた４人が集まってきた。

子猫　「アレンさん、３つも取らはるんですか？」

アレ　「ええ。暗唱は得意な方ですし、剣を使って戦う時もありますから最初は２つにしようと思ってたんですけど。使い魔が居るので手騎士（テイマー）も取ろうと思いまして。」

竜士　「使い魔おるんか？！」

アレ　「はい。２匹居るんですけど可愛いですよ。」

しえ　「私もほしいなぁ。お友達になりたい。」

アレ　「しえみはすぐに召喚できますよ！才能あると思います。」

しえ　「そう言ってもらえると嬉しいなぁ。」

雪男　「皆さん。次は魔法円・印章術の授業じゃないんですか？移動する時間なくなりますよ？」

志摩　「ホンマや！急がな！！」

６人は教室から全速力で移動した。
その中で妙に志摩だけが息切れをしていた。

第十二話　自己紹介と友達（後書き）

＊移動中＊

アレ　しえみ、もうすぐ着きますよ。
しえ　ごめんねアレンちゃん！！私を抱えて走らせちゃって・・・。
アレ　着物ですし走れないのは仕方ありません。それにしえみは軽いのでまったく問題ありませんよ。
しえ　ありがとう！
志摩　はぁっはぁっ！アレンちゃんなんでそない早く走って息切れしてへんの？！
子猫　志摩さん。僕なんかバテて坊におぶってもろてますよ。
勝呂　俺は朝走って鍛え取るからこのくらいは楽勝や。
燐　　俺も余裕だぞ～。志摩、おぶってやろうか？？
志摩　えっ遠慮しときますわ・・・。

第十三話　友千鳥（前書き）

今回のテストは範囲が広くて頑張ってました！
更新が遅くなってしまいすみません。

第十三話　友千鳥

魔法円・印章術の授業

ネイ「図を踏むな。魔法円が破綻すると効果は無効になる。」

あれがネイガウス先生ですか・・・。たしか召喚するのは屍番犬(ナベリウス)だったかな・・・。あれ嫌いなんですよね～。臭いし、グロテスクすぎです。

竜士「アレン。どないした？ぼーっとして。」

アレ「！少し考え事を・・・あれ？しえみと神木さんは出来たんですね。」

竜士「俺らは出来んかった。」

アレ「うん、予想通りですね。」

竜士「どういう意味や！！」

志摩「アレンちゃんの使い魔みたいわぁ！！」

燐　「俺もー！！！」

アレ「じゃあ一匹だけ。“時の破壊者の名において哀れな魂を救いたまえ。”」

ヒュゥッと風が吹きながら現れたのは子犬の姿の名歌。

メイ「くうー。」

しえ「可愛い／／／／！！」

ネイ「狼牙の子供か？凄いじゃないか。そいつらはなかなか使い魔には出来ん。」

子猫「触ってええですか？」

アレ「メイちゃんは大人しい子ですから大丈夫ですよ。」

しえ「この子メイちゃんっていうの？」

アレ「本当は名歌といいます。呼ぶのはどちらでもいいですよ。」

出雲「ねえ。・・・その」

朴　「頑張れ出雲ちゃん。」

出雲「・・・触ってもいい？」

アレ「！はい（ニコッ）あっアレンって呼んでください。」

朴　「私も朴でいいよ。よろしくアレンちゃん。」

出雲「出雲でいいわよ。・・・アレン。」

アレ「よろしくおねがいします。」

しえ「（アレンちゃんすごーい・・・。私もお友達に！！）」

メイ「わぅ～ん・・・。（アレン様・・・。僕を忘れないでください！！泣）」

雪男「・・・はい終了。プリントを裏にして回してください。」

燐　「ちょ・・・ちょっとボク夜風にあたってくる。」

竜士「おう、ひやしてこい・・・。」

出雲「朴！アレンも！お風呂入りにいこっ！」

朴　「うん・・・。」

しえ「お風呂！私も！」

志摩「うはは女子風呂かｗｗええな～。こら覗いとかなあかんのやないんですかね！合宿ってそういうお楽しみ付きもんでしょ。」

竜士「志摩！！お前仮にも坊主やろ！」

子猫「また志摩さんの悪い癖や。」

志摩「そんなん言うて二人とも興味あるくせに～。」

雪男「一応ここに教師がいることをお忘れなく。」

「「「・・・・・。」」」

志摩「教師いうたってアンタ結局高1やろ？無理しなさんなって。」

雪男「僕は無謀な冒険はしない主義なんで。それともう一人忘れてますよ？」

志摩「へ？「先生の言うとおりです。」・・・あ、あああアレンちゃん・・・。」

アレ「僕がいるのもお忘れなく。そうそう最近テレビをみて面白い技を覚えたんです。試していいですか？☆」

志摩「えっとー「やってえぇ。俺が許可するわ。」坊――――！！何をいうてますの？！！「いっきまーす。おりゃ。」ぎぃやあああああ！！！いだだだだ！！！ギブです！！あかん！！ギブ！！」

子猫「綺麗な逆エビですねぇ。」

雪男「テレビで見ただけで出来るなんて・・・。」

志摩「ちょっ助けてぇや！！！」

「きゃあああぁぁぁ！！！」

「「「「「！！！」」」」」

アレ「しえみ！無事ですか？！」

しえ「うっうん！」

アレ「よかった。朴さんも大丈夫そうですね。」

朴　「杜山さんの・・・おかげ・・。」

　読んだから知っていたとしてもやっぱり不安にはなりますね。・・・一度父さんを助けて話を変えてしまったわけですし、何か起こるかもしれない・・・。

竜士「アレン、ぼけっとせんとはよ行くで。」

アレ「あっはい！」

ネイ「何を啼く。・・・いや悪魔の犬に成り下がったこの祓魔(オレ)師を嗤っているのか。」

一度ずれた時の流れは止まることはできない。戻ることもできない。この一つのずれが未来にどう影響してくるか、まだ誰も知らない。

第十三話　友千鳥（後書き）

雪　兄さん、なぜ裸に・・・・。
し　／／／／／／
燐　・・・なりゆきで・・・・。（早く行け・・・・。）
志　アレンちゃんの逆エビの刑やな！
ア　いえ、あれは志摩専用技にしたので☆
志　なにそれー！！？まって！逆エビ以外にもあるん？！！
ア　レパートリーは豊富ですよｖ
竜　そりゃ楽しみやなぁ、志摩。
志　楽しみなんは坊だけやろ？！！！
雪　僕も楽しみです（ニコ）
子　僕もまたあの綺麗な逆エビみたいですわ。
ア　じゃぁ今からでも――――
志　もう嫌やあぁぁぁぁ！！！！

第十四話　此に病める者あり - 前編 -（前書き）

随分更新をしなくてすみませんでした！
これからはもう少し早めに更新出来ると思います！！

第十四話　此に病める者あり - 前編 -

アレ「ふわぁ～・・・。」

眠すぎる・・・。楽だからって仕事を引き受けるんじゃなかった。「引き受けてくれたら学食のゴージャス特大苺チョコパフェ引換券を五枚あげますよ☆」だなんて言うから！！寝不足で立ったまま寝れそうだ。行くんじゃなかった。

メイ［アレン様！！お昼のパフェ楽しみですね♪］

メえええぇぇイちゃあぁぁん！！（※トトロに出てくるおばあちゃんじゃありませんよ☆）可愛すぎですｗｗｗ行ってよかった！！！頑張って良かった！！

アレ「そうですねｖさぁ行きましょうか＾＾」

聖書：教典暗唱術

マダ「大半の悪魔は？致死節？という死の理（ことわり）・・・必ず死に至る言（ことば）や文節を持っているでごザマース。」

教典暗唱術の担任、マダム・ミラジェーンはなんというかぽっちゃりだ。アレンはこの先生が案外好きだった。（熱心に本を読んでいる時に頑張っているからと飴をくれたからなのだが。）

出雲「あ・・・あの・・・忘れました。」

メイ［（珍しいですね。いつもならスラスラ言っているのに。）］

アレ「（うーん・・・。昨日の事引きずってるのかもしれませんね。）」

燐　「スゲー！！お前本当に頭良かったんだな！！！」

アレンがメイちゃんと会話している間に竜士が指され、見事に最後まで言っていた。声のした燐の方を見ると小さい子供のように目を輝かせていた。アレンは思わず微笑んだ。

竜士「本当にってなんや！！？」

キーンコーンカーンコーン♪

しえ「凄いねぇ勝呂君！びっくりしちゃった。」

アレ「流石ですね。竜士。」

竜士「いやいや惚れたらあかんえ？ええけど。ていうかアレンも覚えとるやろ。」

アレ「まぁ。うっすらですけど。」

そういえば、オリジナルで倒してしまうから最近は使ってませんね。

子猫「坊のは頭いい違おて暗記が得意なんですよね。」

竜士「コラ子猫丸？それつまり頭いいゆうことやろ？しばかれたいんかい。」

子猫「あ、はい（汗」

志摩「てか坊やなくて俺にしときぃ。やさしくするしv」

アレ「志摩はないと思いますよ＾＾」

志摩「笑顔でさらりと言わはったー！！！泣」

出雲「暗記なんてただの付け焼刃じゃない。」

竜士「あ？」

メイ「（アレン様？眠いのですか？？）」

アレ「（少し。あー意識がなくなってく・・・。）」

二人の喧嘩止めたかったんですけど・・・もぉ無理です・・・・。

・・・・・WHY??ここはどこ?僕はだr・・あ、アレンですね☆いやいやそれより!

アレ「・・・なんで岩?を置かれて座ってるんだろう。」

子猫「アレンさん。起きはったんですね。実はかくかくしかしかでして・・・。」

志摩「いや、伝わらんて「え、3時間もこのままなんですか?」なんでーっ?!!なんで伝わってますのん??!!」

アレ「気にしたら負けですよ☆それより、あの二人に挟まれた燐が哀れですね。」

子猫「そうですねぇ。志摩さんやったらよかったんに。」

「「フフフフッ。」」

志摩「（ここで生きていけるやろうか・・・。）」

フッ・・・・

急に明かりが消え、真っ暗になった。流石にアレンも驚いた。

「ぎゃぁぁ」　「あだっちょ・・・どこ・・」　「何だッ？！」

志摩が携帯の明かりをつけると、燐は自分の足をおさえながら泣いて、しえみがその燐の腕にしがみ付いていた。子猫丸はなぜか出雲に蹴られていた。そして竜士とアレンは・・・。

竜士「／／／／」

アレ「・・・・。」

アレンが後ろから竜士に抱きついていたのだ。竜士は真っ赤になりながら固まってしまい、アレンはアレンで動かない。

志摩「あの・・・アレンちゃん？」

竜士「／／／・・・アレン大丈夫か？苦手なんか？」

アレ「！すっすみません／／／／最近は平気になってきてるんですが、昔から暗いところはちょっと・・・。ご迷惑おかけしました。」

竜士「迷惑やなんて思おとらん。大丈夫なんやな？」

アレ「クスッ竜士は優しいですね。」

子猫「（それはアレンさんにだけやと思います。坊もまだ自分で気

づいとらんみたいですし・・・。）」

志摩「とりあえず廊下出てみよ。」

子猫「！志摩さん気ィつけてナ。（今はそれどころやありませんね。）」

二人のことをいち早く見抜いた子猫丸でした。

志摩「フフフ。俺こういうハプニングってワクワクする性質（たち）なんよ。リアル肝試し・・・・・・・・・・・・・。」　ギイィ・・

・・・・・・・・・・・・・　バタンッ

志摩「なんやろ。目ぇ悪うなったんやろか・・・・。」

アレ「志摩！逃げてください！！」

竜士「現実や！現実！！！」

バキャァ――ッ！！！

志摩「うおおぉぉ！？」

［グルル？オオォォ゛――――］

出雲「昨日の屍（グール）・・・！！」

燐　「・・・・！」

志摩「ヒイィッ魔除け張ったんやなかったん！？」

竜士「てか・・・足しびれて動けな・・っいだあぁ！！アレン！何ふんどんねん！！！」

アレ「しびれてるって言ってたんでついｖｖ（お義父さんは何をしてるんでしょう。こんな奴を入れてしまうほどボケてはいないはず・・・。）」

ブクウゥ　プチプチプチチッ　ボンッッ！！

ブオォッ　「ひっ」　「きゃっ！」　「！！！」

屍（グール）が急に膨らんではじけた。はじけた途端に液体が飛び散り、アレン達にかかった。

しえ「（み・・・皆を守らなきゃ）ニーちゃん・・・！ウナウナくん出せる？」

ニー［ニーッ！　ニ〜！！］

メキッメキメキッメキメキメキメキッ

ニーちゃんから太く長い木の根のようなものが生えて、屍(グール)とアレン達の間を遮った。

燐　「す・・・すげぇ。」

しえ「ありがとねニーちゃん！」

ニー［ニー！］

しえ「あれ・・・・くらくらする・・・。」

アレンと燐以外は急に苦しみだした。

燐　「え?!・・・皆どーしたんだ?」

出雲「さっきはじけた屍の体液被ったせいだわ・・・あんたら平気なの・・・!?」

アレ「僕は特殊な体質でして・・・。燐もそんな感じなんじゃないんですか?ね、燐?」

燐は焦りながらもアレンの言うことに何度も頷いていた。内心はホッとしているだろうとアレンは思った。

竜士「ハアハアッなんとか・・・杜山さんのおかげで助かったけど・・・杜山さんの体力尽きたらこの木のバリケードも消える・・・そうなったら最後や。」

アレ「(・・・人の気配がする。よかった。原作通りに先生達が待機してくれている・・・。)竜士「バッおいッ!奥村!!戻ってこい!!!」!」

あ・・・考えている間に燐が行っちゃいましたね。ん～原作通りみたいですし、燐の方には行かなくて大丈夫そうですね。原作から外れて危険そうだったら手伝おう・・・。ここで皆に成長してもらわないと。・・・・・この後の京都での戦いの為にも。

志摩「じゃあ俺は全く覚えとらんのでいざとなったら援護しますわ。」

アレ「じゃぁ僕も援護にまわりますね。」

出雲「ちょっアレン！無謀よ！！相手は屍よ！？っていうかその刀何処からだしたのよ！！！」

アレンの手にはいつの間にか日本刀が握られていた。それはメフィストがアレンにプレゼントした日本刀-刻桜(こくおう)-だった。何処から取り出したかって？それは・・・

アレ「企業秘密です☆出雲・・・無謀だと思っているのは皆同じですよ。それでも立ち向かおうとしているのに止めるわけにはいきません。それに・・・僕は仲間を置いて逃げません。」

“アレン!!” “アレンくん!” “っち。もやし!” “アレ〜ンvv” “少年♪”

ね?皆・・・。

竜士「(なんや・・・アレンの雰囲気が変わりおった。)ほないくぇ。“此に病める者あり・・・!!”」

第十四話　此に病める者あり - 前編 -（後書き）

アレンの愛刀

―刻桜―

メフィストがアレンにプレゼントした刀。どこから入手したかは不明。

しかし名刀であり妖刀でもある。最初触れようとしたが、手をはじかれた。

それにキレた黒笑で笑いながら話しかけて［？］主と認めさせた。

メフィ―曰く、その時のアレンの背後に般若が見えたそうな・・・。

第十五話　此に病める者あり - 後半 -（前書き）

随分更新できなくてすみませんでした！！

第十五話　此に病める者あり - 後半 -

アレンは飛び出していった燐の後姿を見送りつつも、この先の事を考えていた。

アレ「（燐は大丈夫かな・・・・。原作通りにいってればもうすぐ帰ってくるはず・・・・。）」

アレンは燐がサタンの息子として目覚めたあの日、前世の父親である獅郎を助けた時から未来が変わっていないかいつも不安だった。

出雲「あたしに従え！！」

［［ヒッ］］

出雲がしえみに何か言われ、何かを吹っ切れたらしく主としての威厳と覚悟を示した。使い魔は言うことを聞き、屍に攻撃をした。

アレ「（吹っ切れたみたいですね。）しえみ。平気ですか？」

アレンは横になっているしえみに優しく話しかけた。

しえ「アレ・・・だいじょーぶ・・・（ニコ」

弱弱しかったが意識もはっきりしていた。

アレ「よかった。もう少しで終わりますから。」

竜士「“耐えざらん！！”」　　パァンッ

竜士は屍を詠唱で倒した。途端にしゃがみ込む竜士。

子猫「坊！！！」

しゃがみ込んだ竜士に駆け寄る子猫丸と志摩。無事を確認し笑顔が戻った二人。そしてアレンはその後現れた燐の姿を見て一安心した。が、やはり原作は変わっていたようだ。

アレ「！！竜士！燐！しゃがんで！！！」

怒って燐の胸ぐらを掴む竜士の上を飛んで桜刻を振るったアレン。ギンッという音が響き相手は吹き飛ばされた。

出雲「屍？！！まだいたの？？！」

生徒たちの顔に再び緊張が走る。その中アレンは屍から一番近い竜士と燐の前に立ち、桜刻を構える。

竜士「アレン！！一人で戦うな！！」

アレ「・・・彼らに手を出すことは許しません。一刀流――桜華！！」

桜が舞ったかと思うと屍に十字架の形の斬撃が入った。屍は切られたところから先ほどのようにパァンッと弾けた。

燐　「すげぇ・・・・・。」

声には出さないが全員目を見開いたままアレンを見ていた。

アレ「大丈夫ですか？二人とも。」

アレンは桜刻を鞘にしまい、後ろに居る燐と竜士に声を掛ける。

竜士「アレン。お前―――「・・・これは」！」

声のする方を向くと・・・

燐　「雪男！」

志摩「先生。」

そこには雪男とネイガウスの姿があった。

雪男「！ネイガウス先生。」

何か言いたげな顔でネイガウスを見るが、本人は一切表情を変えない。

燐　「！（あいつ・・・！？）雪男！！そいつはてき「おや　失敬☆」ングッ！！？？？」

天井から現れたメフィストは見事に燐の背中に着地した。近くに居たアレンは瞬時に竜士の横に移動し避けた。そして先生たちの登場とこの強化合宿が実は候補生認定試験(エクスワイアにんていしけん)を兼ねたものだと説明をうけ、全員開いた口が閉じることがなかった。

メフィ「皆さんは保健室へ。奥村先生、頼みますね。」

全員は雪男に連れられ、保健室に居た。しえみは先生に治療してもらい今はぐっすりと眠っている。その姿を横で順番に燐・志摩・子猫丸・竜士・アレンが椅子に座り、出雲は少し離れたところに座っていた。

燐　「まさか抜き打ち試験だったなんてな・・・・。すっかり騙された!!」

悔しそうに話し始める燐。

志摩「少しは可能性を考えとくべきやったねぇ。」

苦笑しながらも燐と話し始めた志摩。皆どこか不安そうだ。出雲も考えこんでいた。

皆合格ですから安心してくださ～い☆・・・でも屍は原作では2匹だったはずだし、やっぱり少し外れてきてる・・・。これからどこが外れてしまうんだろう。

出雲「・・レ・・アレン！！聞いてる？！」

アレ「へ？！あっすみません。」

全く聞いてなかった。というか出雲の顔怖いです・・・・・。

出雲「だーかーら！どうしてあんなに強いのかって聞いてるの！！」

アレ「えー。強くないですよ（へラッ」

元パラディン補佐だ！とか異世界で戦ってました☆とか言えるわけがない・・・汗。

燐　「いや強いだろ。俺に剣を教えてくれよ！！」

アレ「我流なんで無理です☆なんでと聞かれましても父親のせいですかね。」

違いますよ～。ほんとは異世界で戦ってたからです。メフィストさんはいいですが、お父さん！貴方のせいにしてホントにすみません。（そんなツンツンなアレンも私は好きです☆）ＤＡ・ＭＡ・ＲＥ（黒笑）？

志摩「アレンちゃんのおとん??」

アレ「合格発表の時になれば分かりますよ。」

どーせもんじゃを食べながらあの人バラしちゃいそうですし。

竜士「・・・・・。」

竜士は何も話さず、何か考えながら時々アレンを見ていた。

子猫「（坊・・・どないしたんやろぅ・・・。アレンさんがどーかしたんやろぅか。）」

母親（おかん）ポジションの子猫丸は竜士を心配していた。当の本人はそんな心配に気づかず、アレンを見ていた。

アレ「ちょっと飲み物買ってきますね。」

アレンがそう言いながら立ち上がると竜士もスッと立ち上がった。

竜士「俺も行くわ。」

二人は飲み物を買うために保健室を出た。廊下を歩き自動販売機の所まで歩き出した二人。

アレ「自販まで遠いですね。・・・？どうしました？竜士。」

全く話さない竜士が今度は立ち止ったので流石に心配になったアレン。

竜士「・・・・俺は一人で戦うな言うたやろ。」

ボソッと呟き急に動いたかと思うと、

アレ「竜士？うわっ！！りゅっ竜士？！！／／／」

竜士はアレンの腕を掴み自分の方へ引き寄せた。腕を引っ張られ抱

き寄せられるアレン。突然の事にアレンは顔を赤くさせてパニくる。

竜士「俺はお前が何を抱えとるかは知らん。けど！どんな理由であれ一人で戦う理由にはならんはずや。」

アレ「！りゅ・・・し・・・？」

突然の言葉に驚き、言葉が見つからないアレン。

竜士「独りで抱えるんやない。俺を頼れ・・・。俺やなくても周りには皆居る。もっと頼れ。・・・・心配させんなや。」

アレンは竜士の顔を見る。竜士の顔はいつもより眉間に皺が寄っているが、どこか悲しそうな感じがした。その顔を見てアレンは戸惑った。

アレ「ぁ・・・ごめ・・なさい・・・。・・・・あり・・・がとう。竜士。そんな風に心配してもらうの初めて・・・・。僕の事はいつか貴

方に話します。・・・ちょっと弱音をはいていいですか？」

俯きながら小さな声でアレンは尋ねた。

竜士「・・・・言ってみぃ。」

アレ「不安なんです。いつもいつも怖いんです・・・。守ろうとして動いてもそれは未来を変えてしまうことで変わってしまったらこれからどう守ればいいか分からない。もしそれで守れなかったらどうしようって・・・・。ベシッ　いだッ！！」

竜士はアレンにデコピンをした。アレンはデコピンされた額をさすりながら俯いていた顔を上げて竜士を見た。

竜士「何で悩んでるかはようわからんけど、未来は分かるわけないやろ。例え未来が分かっているとしてもそれは一つの可能性やろ？未来なんか誰にも分からん。それに守れるかどうか分からんから守れるように強くなろうとするんや。俺は守りたいもんがある。それを守る為に強くなろうって思ったんや。」

竜士はいつものようにぶっきらぼうに、でも少しいつもより優しくアレンに言った。

アレ「分からないから・・強く・・・。」

そっか・・・。分からないんだ。最初から守れるかも。未来も。だから強くならなきゃいけないんだ。

竜士「お前も守ったる。」

え・・・？僕も？？

アレ「どうして・・・？？」

守ってもらうことなんて考えたことなかった。でもなんで？？なんで貴方は僕を守るって言ってくれるの・・・？

竜士「大事やから。」

アレ「へ・・・／／／だっ大事って／／／？」

竜士は抱き寄せていたアレンをゆっくり離し、少し赤い顔で・・・でも真剣な顔になり言った。

竜士「俺はお前が好きなんや／／／――――「坊～！！僕いちご牛乳頼むん忘れてましたわぁ☆」・・・。志摩・・・・いっぺん去ねやあぁぁぁ！！！」

走って駆け寄ってきた志摩を一瞬で殴って吹き飛ばした竜士。

志摩「ごふぉぅぅっ！！！なっなんでぇ？？！」

突然のことで状況が理解できていない志摩。腫れた右頬がとても痛

々しかった。

竜士「はぁ。・・・アレンは戻っときぃ。俺が買ってくるわ。それと・・・返事ゆっくり考えといてくれ。ボソッ」

アレ「は、い／／／」

竜士が走り去った後もアレンは先ほどの事で固まったままだった。志摩が呼んでも反応せず、名歌が呼んでやっと気づき保健室に戻ったのだった。

第十五話　此に病める者あり - 後半 -（後書き）

志摩　あの・・・僕放置ですか??
竜士　?何やっとんねん志摩。
志摩　坊。アレンちゃんになんかしはったん?さっき坊が行った後しばらくここで固まってはって。
竜士　志摩。帰ってもそのこと一切話すな。
志摩　?なんでで――――
竜士　分かったな??
志摩　はいいいぃ!!!（顔が般若にしか見えへん（（泣）

第十六話　白き道化（前書き）

久しぶりの更新です。
今回は少しオリジナル要素多めです。

第十六話　白き道化

アレンは自室でクッションを抱きしめながらベッドに寝転がっていた。

・・・・さっきのは夢じゃないんだよね？りゅりゅりゅ竜士から・・・告白されるなんて思ってなかった。

“アレン！！”　“心配させんなや・・・。”　“お前を守ったる。”　“大事やから。”　“好きなんや／／／／”

竜士。君はアレン（僕）とユズ（私）を見てくれるの？？守ってくれるの？？・・・・僕は君を・・・・バタンッ！！

アレンの部屋に子犬姿の名歌が走って入ってきた。名歌にはネイガウスの動きを見張ってもらっていたのだ。

メイ［アレン様！！ネイガウスさんが燐さんの部屋に！！］

アレ「！！やっぱりっ。メイちゃん、僕はクラウン・クラウンで燐の元へ行きます。メイちゃんはお義父さんにこの事を伝えて！！」

メイ［御意！！お気をつけて！］

アレ「――――イノセンス発動。出番だよ、クラウン・クラウン。」

アレンはクラウン・クラウンを発動させ、燐の元へ急いだ。

アレンが燐達を見つけた時には燐は降魔剣をネイガウスに向けていた。ネイガウスは自分が青い夜の生き残りだということを話してい

た。

ネイ「ククク・・・許さん。サタンも悪魔と名のつくものは全て！！サタンの息子など以ての外だァ！！！！」

燐　「っ・・・・・。」

ネイ「貴様は殺す・・・・・・・・この命と引き換えてもな！！！！！」ズギャッ　ドンッ！

ネイガウスは腕に書いてある陣から悪魔の手を出し、燐に攻撃を図った。燐はそれを降魔剣で攻撃もせず避けるわけでもなく自身で受け止めた。手は左の脇腹に刺さった。アレンは眉間に皺をよせたが、まだ出ようとはせず物陰からそれをただ見ていた。

ネイ「・・・・・・・・・！？」

燐　「・・・・・・・・ケホッ・・・気ィすんだかよ。」

雪男「に・・・」

雪男は目の前で起こったことに呆然としている。

ネイ「・・・・・!!!」

ネイガウスも流石に驚き手を陣の中に戻した。

燐　「・・・これでも足んねーっつーんなら・・・俺はこーゆーの慣れてっから何度でも・・・・何度でも相手してやる・・・!!だから頼むから関係ねぇ人間巻き込むな!!!!」

燐は剣を鞘に戻しながら強くそして泣きそうな目で言った。ネイガウスは燐を見て何かを考えてるようにも見えた。その時二人の間にアレンが現れた。

～燐ｓｉｄｅ～

俺がネイガウスと向き合ってる時、急に視界が真っ白になった。そこにはあん時の白い奴がいた。

「ネイガウス。これくらいにして。もう十分でしょ？」

白い奴が話し始めた。声が俺よりも明らかに高かった。こいつ女だったのかよ！！？しかもネイガウスと知り合いなのか？？もしかしたら仲間？じゃぁアイツも青い夜の生き残りか・・・・？

ネイ「なぜパラディン補佐のお前が此処に居るのだ！？ユズ！！」
※パラディン補佐としての名前はユズとして登録している。

燐　「パラディン補佐？んなもん雪男が教えてくれた事にはなかったぞ。」

雪男「兄さん。パラディン補佐はね・・・神父(とうさん)の時に出来た役職でパラディン並の実力を持つ者だよ。“白き道化師”って呼ばれてるんだ。」

燐　「！ジジイの補佐・・・。」

白い奴は俺の方に向いて一礼をしながら言った。

「奥村燐君。雪男君。改めましてパラディン補佐のユズです。燐君とはお久しぶりですね。」

やっぱあん時の奴だ！！！

燐　「あんた・・・ジジイの補佐だったんだろ？！なのになんであん時っジジイの中にサタンが入った時、ジジイを剣で刺したんだよ！！！」

雪男「！！・・・本当なんですか？！ユズさん！！！」

「サタンに傷を負わせるためには仕方がない事です。それに・・・・・。」

燐　「それに・・・なんだよ！」

「いえ、なんでもありません。私はそろそろ行きます。・・・燐君。サタンの息子だという理由だけでこれからも君は色んな人に命を狙われるでしょう。しかし目標を見失ってはいけません。君は君の道を歩けばいい。もしまた危険なことがあったら、私が守ります。」

なんなんだよ、こいつ。サタンを倒すためにジジイを刺した奴なのに・・・どうして安心すんだよ。

燐　「なんで・・・そんなこと・・・。」

「獅郎さんが命を懸けてまで守ろうとしたからです。」

燐　「！！・・・あんたはジジイを・・・・親父をどう想ってた。」

俺がそう聞くとあいつは仮面を付けても唯一見える口を開いて言った。

「大好きですよ。これからもずっと・・・・。私は彼の補佐なんですから。」

それを聞いたら、俺はなんかこいつを信じたいって思った。確かにこいつがジジイを刺した所は見た。けどこんなにあの人を想ってる奴ならきっと信じていいって思った。

燐　「・・・・・ならあんたを信じる。」

「！ありがとう。・・・ネイガウス。貴方も自室に戻りなさい。」

ネイ「・・・・・わかった。」

「それでは――――また会いましょう。」

白い奴はそう言って屋上から飛び降りて消えた。

～燐side fin～

第十六話　白き道化（後書き）

文章の途中にも書いてありましたが、アレンは正体がばれないように補佐としての登録名をユズにしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8098w/

え・・・？祓魔師って？？

2012年1月14日11時45分発行